辺と違って重くなく，乾いているので，雪でも傘はさしません。

結局，生活というものは，どこでも大いに違っていて，又よく似ているものです。そして私のいた，たった三年間に斜里の町にみた変化。それは，丁度その間に秘境・知床半島が国立公園に指定されて北海道観光ブームの波に大きくのってクローズアップされたことによるのですが，目に見えただけでも，斜里町の大通りの店舗が軒なみ改装（国立公園指定による補助金が出るとか），中斜里駅（斜里駅の次，鈍行のみ停車）の駅前の道が舗装され，公民館が建ち，三笠宮一家や，テレビ映画「鉄道公安３６号」ロケ隊がやって来て，社会党出身の町長もワンカット出演，原野の中の一軒家の我家にもはるばる水道がひけ，その他その他。……

さて，二年と少し前，東京へ戻ってきました。東京は何でもあって何でも欲しくなって，それでいて大切なものがないのです。不確かな大きな顔をした〝どうにもならないようなもの〟がのさばっていて，いらいらします。　（6回生）

共働き十年　悪戦の記

金　子　晴　代

◎母の日の前日，学校から帰るや小学三年になる娘がいった。「きょう先生がどんなお母さんになりたいか聞いたよ。私なんて言ったと思う？」「そうね，あまり怒らないおかあさん。」「ううん，家にいるおかあさんっていったんだ。」「……」

この頃の彼女はこう言えば親の心にこたえることをちゃんと知っている。通勤の辛さ，家事労働と職場の仕事の繁雑，社会的圧力などは乗り越えても子供との心理作戦となると弱い。

◎この夏で共働き十年「さて何が残ったかな」の呟きに「あたし」と，できすぎた答。正直いって九年前，彼女の誕生を喜びだけで迎えられなかった複雑な親心。当時私立に勤めていたので，学校規則上は何ら遠慮することなく産休もとれたはずだが，職場の体制，雰囲気はいいようもない圧力となって私を締めつけた。今の公立校では育児時間もとれるのに当時は若さと意地も手伝って遅刻早退なし，休暇もとら（れ？）ず頑張った。大きなお腹で中央線のラッシュにもまれるとどんな異常児が産まれるかという不安で三十分も早く家を出るよう心がけていた。用務員室で張ったお乳を何度絞った事か。この無理が母性保護にいいわけはなく現在にしわ寄せされている。娘は何人かにリレーされて育った。四年目に保育園に入れた。送り迎えの苦労の数々。時間を過ぎて息せき切って駆けつける。一人だけポツンと待っている。保育園の先生方はみないい方ばかりだった。でも遠慮がちにこういわれた。「お母さん，私たちも自分の子どもを預けているのです。お迎えがない

と私たちも迎えに行けないのです。」

◎この二月，痲疹をこじらせて腎盂炎併発，二週間の入院，あの大雪の日は病状も峠だった。今迄学校を休まないと威張っていた彼女もとうとう一ケ月半も休んでしまった。「教員の子は痲疹をこじらせますね。子供の病気より親は自分の休むことを心配するから子供も落着いて寝ていられませんよ。」と医者に説教された。熱にうなされながら彼女はこういった。「ママ，夏休みにハシカにならなくてゴメンネ。」

◎北教組の婦人部大会，会場を埋めた働く仲間たちの苦労や頑張り，私よりもっともっと多くの問題を抱えている。私がとにかく十年やってこられたのも，自分だけではないという支えがあったから。学生時代に頭の中で考えていたことが生活を通して身についた感じ。「この道は長いけど歩きながらいこう……」の心境で今後も迷いながらも働き続けるでありましょう。

◎「ママは活火山ね。」「どうして」「だって先生がよく怒る人は活火山だって。そうするとパパは休火山，私は死火山。」

娘の心は親から離れ始め，先生，友だちに傾きつつあり，私は淋しさを感じながらも，子供の成長を喜び，かつ子供に教えられ，自己を反省するこの頃です。　（6回生）

テレビティレクター雑感

前　田　敬　子

わたくしは37年3月卒業のOG，日本テレビ教養部のディレクターです。

先日，同じ部の自他ともに許す（？）手相見の名人に「君は学者になったら良かったのに。学界はたいへんな損失をしたものだ」とおもむろに言われ，びっくりするやら，うれしいやら。そうか，そうだったのかとひとりうなずいていました。ところが，その直後地理科のクラス会で，なつかしい友人にそれを披露したところ，皆な全然本気にしてくれず一笑に附された次第。アー　残念なり，手相より，見る眼をお持ちの友達を信用するほかないのだと自分に言い聞かせて，その件は諦らめることにしました。だいたい，大それた考えは起こさずに，今のように「フイルムスタート」「カメラさん，アップ，アップ，そうもっと寄って！」なんて言っている方がよさそうな，劣等生でしたもの。

その劣等生，今でも12月になると卒論の夢を見ます。出演者がなかなか決まらず追い込まれた時，卒論の締切り前の緊迫した気持を思い出します。今までのとこ，卒論の時よりずっと楽に切り抜けて来ていますが。ともあれ，卒論はわたしに勉強をしたと思わせる唯一のもの。自分で見て，